

鉄舟を読む

「料理に禅味を盛ってみよ」

八木忠七とのやり取りを始め、小川町ゆかりの英傑山岡鉄舟について町外の人に聞くと、一定の歴史好きくらいしか知らない。西郷隆盛との談判も明治天皇の侍従としての実績も、大衆が、講談や読み本、芝居などで語り継ぐにはやはり地味すぎる。

大衆に語り継がれる同時代の主役たちと言えば。

例えば、夜更けの池田屋・・・

表扉を打ち破りなだれ込む新選組。局長近藤勇の大音声「御用改めである。手向かいする者は役命により斬る！」(と言ったかどうかは知らないが)。殺気みなぎる攘夷志士たちが一斉に抜刀し大階段を駆け下りてくる。「是非もなし…」近藤も愛刀虎鉄を抜き放つ。

または、寒夜の近江屋・・・

京都見廻組佐々木只三郎(諸説あり)と精鋭たち。目指す部屋の襖を開けると、軍鶏を肴に酒を酌み交わしていた坂本龍馬と中岡慎太郎が同時に腰を上げる。「中岡、刀は！」自分を暗殺に来たと理解したときにはもう遅い。佐々木の大刀が龍馬の額を割り脳まで届いている。「坂本君、死ぬまで半刻くらいはあるだろう。好きな歌でも歌いながら逝け」(もちろん架空のセリフ)とどめも刺さず嵐のように去っていく。

しかし美学は、血煙に佇む男の背中にだけ宿るわけではない。言わば精神性の高さという点で、『利休にたずねよ』『信長死すべし』等で人気の直木賞作家山本兼一が、鉄舟を男の中の男として語っている。

以下、氏の小説『命もいらず名もいらず』からの抜粋、命がけの談判終えた鉄舟と西郷の会話である。

(西郷)「ことを為すには上手下手がありもす。できる人とできぬ人がある。じゃっどん、山岡先生は、道を突き進んでおられる。ことを為しているとは思えん。」

「そうでしょうか。」

鉄舟には、西郷が何に感心しているのか、わからなかった。(中略)

「先生が、もし談判をうまく成し遂げようと思って来られたのなら、おいは動かなかつた。総攻撃は中止せなんだ」

そういうものか、と鉄舟は思った。たしかに、西郷とうまく談判しようなどというつもりは、毛頭なかつた。ただただ夢中で突き進んで来ただけだ。(中略)

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困りもす」

そのどれも、鉄舟は欲しいと思つたことがない。

単なるお茶漬けのアドバイザーではない鉄舟の剣聖としての顔を再認識できる名作である。

(教頭 堀口 利樹)

